

令和 2 年 6 月 14 日現在

機関番号：31603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16457

研究課題名（和文）目標が共有されていく過程についての研究 少年サッカーチームを題材として

研究課題名（英文）A Study on the Process of Sharing Goals: Using Youth Soccer Teams as the Subject

研究代表者

名取 洋典 (Natori, Hironori)

医療創生大学・教養学部・准教授

研究者番号：80708991

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：少年サッカーを題材として、チームの目標がメンバーたちに共有される過程について、サッカーへの動機づけとの関連から明らかにすることを目的として、継続的な質問紙調査を行った。その結果、二つのことが明らかとなった。(1) 動機づけの違いは、チーム内での違いよりも、チーム間での違いが大きいこと(2) チームごとに目標は異なるが、共通してみられる変化と、チーム特有の変化があることである。目前の大会について好成績を残すという以外の目標を共有することの難しさが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

少年サッカー等、少年スポーツに取り組む子供たちが、実際にどのように目標を捉えているの明らかにしたことに意義がある。

複数回の調査ゆえに、参加人数が減少したり、記述量が減ったという問題点も明らかになった。

また、チーム内の立場の違いによって、個人の動機づけが異なる可能性を示したことは、指導者が、子供たちの立場の違いを固定化してしまうことへの配慮が必要であることを示す結果であり、今後、様々な指導場面での指導者のあり方について示唆を与える結果であった。

研究成果の概要（英文）：A continuous questionnaire survey was conducted with the aim of clarifying the process of sharing the goals of the team among the members, focusing on youth soccer, in relation to the motivation for soccer. As a result, two things became clear. (1) The difference in motivation is that the difference between the teams is larger than the difference within the team. (2) Each team has different goals, but there are common changes and changes unique to each team. The difficulty of sharing goals other than leaving good results for the last competition was shown.

研究分野：教育心理学

キーワード：継続的調査 自由記述 目標 動機づけ 少年サッカー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、少年サッカーを対象として、指導者の言語的なフィードバックと競技者の「やる気」との関係について研究を進めてきた。そして、競技者が指導者の言語的フィードバックが行われた意図をどのようにとらえているのかに注目することの重要性を指摘した(名取, 2007)。競技者は、指導者から受ける扱いによって、自分のチーム内での立場、指導者からの期待等様々な情報を受け取ると考えられるが、特に、「何をを目指すのか」という情報が伝達されることが重要であるという考えに至った。そこで、既に具体的な目標がある程度共有されていると想定される、少年サッカーチームという集団を対象として、目標と合致しない指導者のフィードバックが学習者の動機づけにどのように影響するのか検討を進めることが必要だと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、目標がチームの中で共有されていく過程を明らかにすることであった。

共有されている目標と合致しない「肯定的フィードバック」は、結果状態としての目標を不明確にするという仮説を立て、既に具体的な目標がある程度共有されている集団を対象に、目標と合致しない指導者のフィードバックと学習者の動機づけの関連について検討を進める計画であった。

そこで、少年サッカーを対象として調査を実施した。協力チームの状況を考慮して、小学生が回答した自由記述の分析を中心としたため、指導者のフィードバックについては明確な記述を射るることができなかった。そこで、(1)チーム内のレギュラーかそれ以外かというチーム内での立場の違い、(2)チームごとの違いに注目しながら、記述される目標や動機づけ指標の違いを明らかにすることを目的として分析を行った。

3. 研究の方法

地域のサッカー協会の協力チームの選定を依頼し、協力に同意を得られたチームに対して実施した。

(1) 少年サッカーチーム1チームを対象とした質問紙調査

東北地方の中核市にある1つの少年サッカーチームに所属する小学5,6年生を対象とした。調査は、2018年11月と12月、2019年2月の3回行った。1回目の調査では18名、2回目の調査では22名、3回目の調査では20名の回答を回収し

(2) 複数の少年サッカーチームを対象とした質問紙調査

調査は、2019年4月から2ヶ月に1度、2020年2月まで各チームに質問紙を郵送する形で行われた。5チームの内、2チームについては、4月の調査のみ回収した。残る、3チームについては、2019年4月、6月、8月、10月、12月に加えて、2020年2月のすべての調査の回収を行えたが、参加人数は月ごとに変化した。2019年4月の調査の参加人数は98名であった。以降順に、55名、54名、53名、50名、42名が参加した。

(3) 調査内容

基本属性 性別と年齢に加えて、ポジション(FW・MF・DF・GK・決まっていない)と出場機会(レギュラー・サブ・試合によっていろいろ)を尋ねた。ポジションと出場機会についてはいずれか1つを で囲むことを求めた。

自由記述 「チームの目標を教えてください」という質問に対する自由記述を求めた。また、「将来の目標」、「サッカーについての今の目標」、「コーチや監督から言われて覚えている言葉」という質問についても回答を求めた。

サッカーにおける学習意欲 西田(1989)が標準化を行った体育における学習意欲検査(AMPET)の項目を、サッカーを対象とする表現に変更して用いた。また、AMPETは(1)学習ストラテジー、(2)困難の克服、(3)学習の規範的態度、(4)運動の有能感、(5)学習の価値、(6)緊張性不安、(7)失敗不安という7つの下位尺度とL尺度に8項目ずつの64項目で構成されているが、本研究では、複数回の調査における、対象者の負担軽減のため、短縮版、低学年版も参考にしながら、7つの下位尺度について各4項目の28項目(5件法)で測定した。

4. 研究成果

(1) 少年サッカーチーム1チームを対象とした質問紙調査(名取, 2019a; 名取, 2019b)

自由記述の分析から明らかになったこと 分析には、樋口(2014)の作成したKH Coder 3を使用した(以下同様)。分析の結果、大会の直前の時期には、好成績を残そうという目標が共有されるが、それ以外にチームとしての共通した目標は認識されていないことが明らかとなった。

チーム内の立場と動機づけ 有能感は一貫して、レギュラーの方が高く、レギュラーという立場が自信を生むのだと推測できる。また、困難の克服は後半の3回では、レギュラーの方が高かった。一方で、1回目の調査では、レギュラーの方が低かった不安は、2回目、3回目では、むしろレギュラーの方が高くなっていった。目標として掲げた生成績が、思ったように出ない場合には、試合に出続けている立場の子どもたちの方が、不安が高まってしまふことが明らかになった。以上のことから、(1)大会直前にならないと目標は共有されず、共有される目標は大会の成績に関することであること、(2)チーム内の立場によって、動機づけが異なることが示された。

(2) 複数の少年サッカーチームを対象とした質問紙調査

複数のチームでの調査結果を比較検討することにより、主に2点のことが明らかとなった。

動機づけの違いは、チーム内での違いよりも、チーム間での違いが大きいこと
 チームごとに目標は異なるが、共通してみられる変化と、チーム特有の変化があること

サッカーにおける学習意欲得点についての平均値の検定

各回のサッカーにおける学習意欲の7つの下位尺度を従属変数、立場(レギュラー・非レギュラー)とチーム(チームA・チームB・チームC)を独立変数とする、2×3の二要因分散分析を行った。すべての分析において、有意な交互作用はみられなかった。

4月の運動の有能感への、立場の有意な主効果のみがみられた。レギュラーの有能感は、それ以外の競技者に比べて高いことを示す結果であった。6月においても、運動の有能感への、立場の有意な主効果がみられた。ここでも、レギュラーの有能感は、それ以外の競技者に比べて高いことが示された。しかし、有能感以外に立場の有意な主効果はみられなかった。

一方で、チームの主効果は、6月、12月の学習ストラテジーにおいて有意であった。また、6月、12月、2月の学習の価値への、チームの主効果も有意であった。多重比較を行った結果、チームAに比べて、チームB、チームCの得点が高い傾向が示唆された。加えて、12月の困難の克服、学習の規範的態度への、主効果も有意であった。チームAに比べて、チームBの得点が高いことを示す結果であった。

今回の結果からは、チーム内での立場の違いよりも、チーム間の違いが大きく影響することが示唆されたと考えられた。

自由記述のチームごとの分析

各チームの調査回ごとに「チームの目標」の記述を分析した。KH Coder 3を使用し、最頻150語を抽出語、出現回数が複数あったものを表A-1から表Eに示す。

Aチームは、6回の調査で一貫して「勝つ」という目標の記述が多くみられる。ただ、「大会」との記述にとどまり、具体的にどの様な大会なのかについては不明確なままであった。

表A-1		表A-2		表A-3		表A-4	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
勝つ	4	大会	6	大会	5	大会	6
試合	2	優勝	4	優勝	3	勝	5
多い	2	リーグ	2	勝つ	2	勝つ	2
		勝つ	2	全国	2		

Bチームでは、「全日本(全国)」「大会」のほかに、4月の調査では「パス」を繋ぐサッカーという、大会の成績以外の記述も複数人からみられた。また、全国大会の予選が終わった、2月の調査では、「最後の大会で優勝して」終わりたいとの目標を、複数人が挙げていた。

表A-5		表A-6	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
勝つ	4	勝つ	4
大会	11	大会	3
優勝	5	優勝	3
勝つ	2	勝利	2
		練習	2

表B-1		表B-2		表B-3		表B-4	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
大会	8	優勝	5	大会	4	大会	5
全国	6	サッカー	4	優勝	4	全国	4
サッカー	5	少年	4	県	2	優勝	4
パス	3	大会	4	全国	2	サッカー	3
全日本	3	全国	3			行く	2
出場	2	全日本	3			少年	2
優勝	2	試合	2			全日本	2
中	2						

Cチームでは、調査対象人数が多かったこともあり、4月(1回目)の記述は多岐にわたる。また、チームの中に、トップチームとは別に、セカンドチームがあり、それぞれにめざしている大会が違うため、セカンドチームが主に参加している「あすなる」大会と、どちらのチームも参加している

表B-5		表B-6	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
優勝	5	優勝	4
オノヤ	4	最後	2
全国	3	大会	2
大会	3		
向ける	2		

「区大会」、トップチームが参加している「市大会」とその先の「県大会」そのほかの大会の記述が混在している。ここでもやはり、間近に迫った大会で好成绩、結果を残すことが共有されている様子がうかがえる。

表C-1		表C-2		表C-3		表C-4	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
大会	14	大会	10	大会	18	大会	17
優勝	10	勝つ	5	優勝	16	優勝	8
チーム	6	チーム	4	カップ	5	試合	6
あすなる	5	試合	4	勝つ	5	勝つ	4
区	4	優勝	4	色々	4	あすなる	4
楽しい	4	連携	3	試合	3	残す	3
サッカー	3	練習	3	出場	3	結果	2
決勝	3	残す	2	リーグ	2	いろいろ	2
トーナメント	3	市	2	横浜	2	キャプテン	2
進出	3	表C-5		区	2	チーム	2
試合	3	抽出語	出現回数	残す	2	前	2
練習	3	大会	11	市	2	多く	2
協力	2	優勝	10	多い	2	表C-6	
県	2	勝つ	4	神戸	2	抽出語	出現回数
勝つ	2	区	3	表D		大会	18
声	2	たくさん	2	抽出語	出現回数	優勝	11
戦う	2	県	2	大会	22	区	7
分かる	2	市長	3	県	17	勝つ	4
		試合	2	優勝	8	いろいろ	2
				残す	3	チーム	2
				出場	3	市	2
				成績	3	前	2
				ほか	3	表E	
				良い	2	抽出語	出現回数
				行く	2	大会	6
				全国	2	全国	4
						優勝	4
						県	3
						試合	2
						失点	2
						勝つ	2
						点	2

D チームの記述につ

いては 4 月の物しかな

いが、この時点から、「県大会優勝」という目標が、全員に共有されている様子が明らかとなった。

E チームでは、失点を抑えて、県大会に優勝し、全国大会に出場するというコンセプトが、4 月の段階から共有されている様子がうかがえた。

今後、具体的にどの様な指導者の働きかけが、目標の影響に影響をあたえるのか、個人個人がもつ目標とチームの目標との関連および、その関係性がどのように動機づけに影響するのかなどを明らかにしていきたい。

< 引用文献 >

樋口耕一(2014).社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版.

名取(2007).指導者のことばが少年サッカー競技者の「やる気」におよぼす影響 教育心理学研究, 55, 244-254.

名取洋典(2019a).少年サッカー競技者が記述するチームの目標の変化 日本心理学会発表論文集, 83, 256.

名取洋典(2019b).チーム内での立場と学習意欲 少年サッカーチームにおける検討 日本教育心理学会総会発表論文集, 61, 259.

西田 保(1989).体育における学習意欲検査(AMPET)の標準化に関する研究 達成動機づけ論的アプローチ 体育学研究, 34, 45-62.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 チーム内での立場と学習意欲 少年サッカーチームにおける検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 少年サッカー競技者が記述するチームの目標の変化
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 認識しているチームの目標と学習意欲の関連 少年サッカーを題材として
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 チーム内での立場と学習意欲（2） 複数の少年サッカーチームにおける比較検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 少年サッカー競技者が記述するチームの目標の変化(2) 複数のチームの比較検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 友人関係への動機づけと大学在籍意思の変化 大学初年次教育での調査から
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 友人関係への動機づけの違いとグループ活動への動機づけの変化 大学初年次教育における検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 少年サッカー競技者の「やる気」の評定 評定理由の自由記述の分析
3. 学会等名 日本発達心理学会第27回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 友人に対するコーチの言語的フィードバックの意図を少年サッカー選手はどのように捉えるのか？
3. 学会等名 第31回国際心理学会議 / 日本心理学会第80回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 大学初年次の社会的動機づけの変化 友人関係とグループ活動に注目して
3. 学会等名 日本教育心理学会第58回総会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 名取洋典
2. 発表標題 少年サッカー競技者の「やる気」の評定 教員免許状更新講習受講者による評定
3. 学会等名 日本教育心理学会第57回総会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----